

循環経済ビジョン研究会（第3回） 議事要旨

日時：平成30年9月28日（金）9:00～12:00

場所：経済産業省別館 227 会議室

出席者（敬称略）

出席委員：

細田座長、今井委員、小野田委員、喜多川委員、嶋村委員、田島委員、馬場委員、張田委員、平野委員、村上委員

ゲストスピーカー：

東レ株式会社 産業素材事業部長 奥村勇吾氏

本田技研工業株式会社 カスタマーファースト本部 資源循環推進部 部長 阿部知和氏

政府出席者：

経済産業省産業技術環境局資源循環経済課 課長 福地真美

経済産業省産業技術環境局資源循環経済課 課長補佐（総括担当） 荒田英美子

事務局：

三菱UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 環境・エネルギー部 清水孝太郎、加山俊也

議題

- ・ 話題提供（張田委員、平野委員、奥村氏、阿部氏）
- ・ 循環経済ビジョンに関する論点及び循環経済の実現に向けた共通課題について

議事概要（意見交換部分）

<「循環経済ビジョン」の方向性について>

- ・ 「循環経済ビジョン」では、新しい社会像を描いていくことが必要である。方向性としては、人目を惹く「グラビアページ」としてのコンセプト（空中戦）があり、同時に地に足の着いた具体論（地上戦）を備え、両者をしっかりと繋げて作成できると良いであろう。
- ・ 「循環経済ビジョン」では消費者の観点を盛り込む必要があり、一般消費者の意識を変えていくことも重要である。SDGsの目標12では「つくる責任、つかう責任」が掲げられているように、生産者と消費者は対となる存在である。
- ・ 日本のリサイクルは、クローズドループを極めるための努力をしているが、他の製品や、また用途とも結び付けた横断的なリサイクルを検討すべきではないか。
- ・ ビジョンへの広い理解を得るためには、CE1.0とCE2.0の位置づけをより具体化し、明確で平易な表現を用いて整理する必要がある。
- ・ CE1.0の世界は、排出者目線であり、廃棄物の適正処理やゼロエミッションを目指すことが前提である。ここでは3R推進が資源循環における基礎的な概念として位置づけられている。一方、CE2.0では、そもそも廃棄物という概念がなく、何かを作るための原料としてリサイクルを行うという利用者目線が前提になる。ゼロエミッションとは全く異なる世界を目指していると整理できるのではないか。
- ・ 排出者目線から利用者目線への移行が必要ではないか。これまでのリサイクルは、排出者目線で捉え

られることが多く、利用者目線へ転換することが必要である。我が国では、利用者に向けた製品を作るための技術力を有しており、視点の転換を図れば新たな付加価値を創出できる可能性がある。

<「循環経済ビジョン」が想定する時間軸について>

- ・ 時間軸の考え方についても整理すべきではないか。どの程度先の将来を見据えたビジョンか、また素材・製品における将来的な技術革新なども念頭に置く必要がある。
- ・ リサイクル業界の現状を鑑みると、CE1.X を通過せずに CE2.0 を実現することは難しい。「循環経済ビジョン」では想定する時間軸を示した上で、目指す社会像を実現するための過程も提示しなければ、関連業界における実践も難しいだろう。
- ・ 今後、現在は製品に使用されていない素材がリサイクルの対象になる可能性もある。その場合、個別リサイクル法など既存の方法論が通用しなくなる可能性がある。循環経済ビジョンでは、将来的な素材戦略を製品・産業横断的に考えていく必要がある。

<生産性の指標について>

- ・ 資源生産性のデータとして、GDP を国内物質消費（DMC）で除した値を用いているが、分母は直接物質投入量（DMI）とすべきである。
- ・ GDP で捉えられるのは金銭的な付加価値のみである。安心・安全性の向上、環境配慮、リスク低減といった付加価値が反映されないので、こうしたものも考慮すべきではないか。

<「新たな市場」の位置づけについて>

- ・ 循環経済ビジョンでは、いわゆるシェアリング・リース・サブスクリプションモデル等といった「機能経済」についての記述を厚くしていくべきではないか。メーカーの取組みは現在でも最終処分量の削減・リサイクル率の向上、といった次元に留まっている。しかし、機能経済の進展は製造業の括りが壊れるほどのインパクトと認識している。「機能経済」に関する部分の充実を図ってはどうか。また、「循環経済」と「機能経済」の関係性についても明確にすべきである。
- ・ 「プラットフォーム」「プラットフォーマー」という用語をきちんと定義し、認識を統一していくべきである。循環経済ビジョンでは、循環経済の分野でターゲットとするプラットフォームビジネスに特化して取り扱うべき。
- ・ 我が国のリサイクルは、ただ単にコンセプトだけでなく、社会に根付かせるだけの実力がある。ビジョンで描く新たな社会像では、再生材市場をさらに開いてゆくことを業種間連携で実現させていくことも視野に含めるべきであろう。我が国は他国と比較して業種間連携が得意である。「新たな市場を創る」「そのための社会的インセンティブを創る」ことがキーワードとなる。

<「循環経済ビジョン」実現に向けた具体的施策について>

- ・ ビジョンを実現するための政策や各主体の役割分担についても議論する必要がある。経済合理性のある部分は民間が自ら担うことが可能であるが、そうではない部分は政府で誘導していく必要がある。本ビジョンは、環境ジャスティスではなく産業政策の観点で取りまとめるべき。
- ・ CE2.0 の世界は、業種や取り扱う素材によっても異なる。また、業種によっては現行法令が障害となる場合もあるかもしれない。既存法令の内容や運用方法の見直しも含めて議論を進めてはどうか。

以上